

我が戦前生活綴方教育史研究の回顧話

川口幸宏

中内敏夫著『生活綴方成立史研究』（1979年、明治図書）紹介

以下は、ぼくの大学院生時代最後の筆。この原稿を公にした年1976年4月1日から、埼玉大学教育学部で「教育方法論〔生活指導〕」を主として講義をすることになった。

研究案内『綴方生活』⑭

前回の研究案内において、『綴方生活』誌ぬきで「生活綴方」運動を論ずることはできない一少なくとも、その発生・成立・展開期までの「第一次史料」という評価と位置づけが正当に行われなければならない旨を述べておいた（復刻版『月報』第13号、p.40）が、『綴方生活』誌（小砂丘忠義主宰）こそ「昭和初頭における中枢部を形成」したとみなし、生活綴方の「側面史」「前提史」「前史」的な取り扱いを否定して真っ正面から史的構造を解明しようとした研究書がある。中内敏夫『生活綴方成立史研究』（1970年、明治図書）がそれで、著者の15年にも及ぶ研究生活して纏められたもの。教育学博士号の請求論文を一部に含む、およそ1000ページにも及ぶ文字通りの大著である。生活綴方を学習ないし研究を志す学生が、時には「辞書」的に使用しているとも聞くほどで、従来生活綴方史研究とは比較にならないほど対象領域が広く、資料収集に関しても深くかつ幅広い。同書のあとがき「書のあとに」によれば、大学院在学中の論文を含むとはいうものの書の大半が「大学の研究システムからまったくはなれてしまった時期に書かれた」ものであるというから、著者の生活綴方史研究にかけた情熱 — 校務の間隙をぬっての資料探索と執筆活動は、私など「甘え」の多い後進の世代などが学ばねばならぬもので、研究方法・内容ばかりでなく研究者姿勢についても多くを語る好著である。

ところで、本著書は発表当時、各方面の研究者に反響を呼び起こしている。ちなみにそれらを列挙すれば、井野川潔「教育運動史研究の方法について」（1971年10月『教育運動史研究』13号）、竹内常一「書くことによる教育の体系としての生活綴方」（1972年1月『生活指導』）、全生研座談会「生活綴方の成立とその解消論をめぐって」（1972年3月『生活指導』）、川合章書評（1972年3月日本教育学会『教育学研究』）、志摩陽伍「生活綴方における生活認識と生活の組織(3)」（1972年12月『作文と教育』）など。これらの論稿によって提示されている諸問題をここで再録することはしないが、いずれも著書理解のためには欠かすことの出来ない重要なものである。

序 説 生活綴方の概念と研究の視覚

第一部 随意選題綴方運動（最章・節 略）

第二部 綴方教師の誕生

第一章 雑誌『綴方生活』創刊の史的構造

第一節 『綴方生活』創刊の伏線

第二節 『綴方生活』の創刊

第二章 日本の学校教育制度と生活綴方 — 野村芳兵衛「生活学校」の場合—

第一節 本章の課題

第二節 神学から人間学への転回

第三節 昭和期における「生活教育」の体系の人間学と綴方教師

(第二部は、細項目以下 略)

上は目次である。序説・第一部・第二部それぞれに特徴ある記述がなされているが、本著書を買っているのは、一口に言えば、「書くことによる教育の体系としての生活綴方」の探究であり、そのことによって従来の研究史に欠落ないし記述の不足していた、『綴方生活』第二次宣言が正面から取り扱われたのであった。

中内が「生活綴方のこの概念には当然異論があり得るであろう」としながらも、しかし、「生活綴方成立のドラマやその本質を解き明かすうえでもっとも有効である」という立場を強調して提示した「生活綴方」の定義は次の通りである。

「ここに「生活綴方」(または「生活綴方のしごと」とは、子どもや青年にひとまとまりの日本語の文章を一定の体系に則し手順を踏んで書かせ、さらにはこうして書かせた文字作品を彼らに読ませること、およびこれらのしごとに派生して生じる諸種の教育的営為の遂行をもって、正字法 (orthography)、書法 (calligraphy)、修辞法 (rhetoric) の教育だけでなく、知育と徳育を含んだ全体としての教育実践の成立と判断する教師の側の意図的なしごとの歴史的に特殊なひとつの形態をいう。」(13 ページ)

この定義化によって、中内は、芦田恵之助らの随意選題綴方に、すでに「生活綴方」の「教育方法」のうえに重視する立場のある一つのあり方があらわれたとする。これが第一部設置の基本姿勢である。ただそれだけでなく、『赤い鳥』綴方運動や「プロレタリア綴方」運動とまったく切り離して説くこともまた対象に即した方法でないとする。

しかしながら、先にも述べ、また中内自身が語っているように、本著書のもっとも特徴とするところは「雑誌『綴方生活』創刊前後の事情解明という手順を用いて生活綴方成立史を明らかにしようとした」ところにある。さらにいえば「野村芳兵衛、小砂丘忠義～郷土社関係者たちの結集と第二次『綴方生活』誌の発刊、そしてそのうち出した特徴ある教育方法の公立小学校制度への定着過程」の「成立と展開の史的構造」を解明しようというところにある。

中内によれば、それまでの生活綴方研究史は、郷土社・雑誌『綴方生活』(第二次『綴方生活』)の関係者の動きが、①随意選題綴方運動→『赤い鳥』綴方運動の研究ルートでいけ

ば後史として、②新興教育運動の研究ルートでいけば前史または側面史として、③生活綴方関係の地方史または個人史の研究ルートでいけば前提史として位置づけられ、生活綴方史研究図の中では正面からの取り組みの対象としてなりにくい地点に立たされていた、という。ところが第二次『綴方生活』は、休刊がちとか小砂丘の個人営業などといった外見上の弱さとは違って、実質的には、同時期の生活綴方成立史に重要な役割を果たす綴方教師の地方集団や新興教育運動関係者が「直接、間接、しかしかなり密接に」結びついており、「ひとつの思想雑誌と思想集団」であったのである。

この「ひとつの思想雑誌と思想集団」を形成せしめたというのが、いわゆる「『綴方生活』第2次宣言」である。これこそが「関係者の結集宣言」とみなすべきであって、『綴方生活』創刊号の「我等の使命」をそのようにみなすのは「初歩的な誤り」だ、とさえする（41 ページ）。中内は「第2次宣言」を次のように読み取っている。

この「第□次宣言」を特徴づけているのは、まず第一に、「生活に生きて働く原則を吾も掴み、子供達にも掴ませる」というくだりに表れている同時代の教育の思想としての一つの論法、つまり「原則」が「吾」や「子供達」の外側に客観的に存在しており、それをと子どもにつかむとき初めて「理想」の世界に蘇る存在であるという意味においては教師も子どもも同次元に生きる存在であるという認識である。この一種の決定論的な人性論は、上京前の野村と小砂丘が、相互にはかなり異質な思想遍歴を経て、しかしともどもにこの期まで到達していた立場であった。ところでもうひとつ、「吾々同人は、綴方が生活教育の中心教科であることを信じ、共感の士と共に綴方を中心として、生活教育の原則とその方法とを創造せんと意企するものである」というくだりに表れている考え方も注目に値する。（中略）

綴方を・・・（中略）・・・国語科綴方と考えていない点では、昭和4年の「吾等の使命」もこの5年の「宣言」も共通している。ただ、・・・（中略）・・・「吾等の使命」に、（つづるしごとそのものを、文章表現技術の訓練を含む「生活に生きて働く原則」を子どもに認識させ、あるいはこれに対する感応と組織の能力を発達させていく過程として一元的に秩序づけるという）観点が全くないとは言えないが、はっきりしていないのに対して、「宣言」では正面に押し出されているのが、両者の大きな違いである（619-620 ページ）。

この長い引用に見られた第2の立場こそ、中内研究の中枢部である。第二次宣言に関する峰地光重の関わりについては本『月報』の第3号において触れておいたことなので詳しくはしないが、同時期における綴方教育の動向を顕著に象徴している出来事である。いずれにしても、この「第二次宣言」を取りだした中内研究は、海老原治善『現代日本教育実践史』（1975年、明治図書）においても、その着目の仕方において共感を呼んでいる。中内は「第二次宣言」のうち綴方の「中心教科」思想の原型は、すでに大正7年から2、3

年のうちに、小砂丘忠義が四国の山間部の小学校教室でつくりだした教育方法にみられることを解明しようとした。いわゆる「生活綴方の原像考」である。この研究のエキスはかつてまた、雑誌『教育』において同題目で発表されている（中内『近代日本教育思想史』1973年、国土社）。従来の小砂丘研究をはるかに超えるものとして・・・(略)・・・必読論文である。

私は『月報』第2号において、中内研究を「これまでの生活綴方研究における一つの到達点」とした。というのは、中内が、きわめて意欲的に先行研究を批判し乗り越えようとしている点、そして実証のために資料収集を他の研究にはまったく類を見ないほどに精力的に行っている点、かつまた「生活綴方」概念に新しい教育史的意味を付与した点において、大きな成果をもたらしているからである。現在、生活綴方研究が広範な立場から各方面で盛んに進められているのも、ひとえに中内研究ある所以だと言ってもよい。生活綴方研究史に中内研究が落とした価値は偉大なものがある。しかしながら、これは「一つの到達点」ではあってもすべてではない。私はそのような意味において「これからの研究は、そこが出発点となるであろう」と述べておいたのである。たとえば、中内自身が語っているように「生活綴方」概念が中内規定によってこぼれ落ちる研究対象がないかどうか、最近当事者間で問題となっている生活綴方教育ないしはその運動の地方的特色をどう説明するか — 中内研究自体でどのように解決されているのか —、資料の読み取り方に問題はないかどうか、そのことによって「生活綴方」の質的な評価が問われることにならないか、他の運動たとえば新興教育運動の評価に再吟味の余地はないか（教育運動史研究会からは、疑問と批判が出されている）、中内研究の基本概念である「共同体」思想で生活綴方思想を切ることができるか — たとえば、綴方教師のほとんどが、青年期に生命哲学やマルクス主義などを学ぶことによって自我が形成されてきたことと、第一次宣言と第二次宣言に共通してみられる教育「解放」思想とを、「共同体」思想でどこまで解決できるのか — などといった論点が、中内研究から「出発」させられているのである。これらの「出発」させられた論点の一つひとつについて整理し中内研究と対照させる力量は、私にはない。私自身が、それらの提出されたものをよりどころとして、研究を「出発」させ深めてゆきたいと思っている。

< 出典 >

『綴方生活』復刻版月報第14回配本附録月報第14号、1976年3月5日発行、『綴方生活』復刻版月報編集局、編集・発行人・井野川潔、発行・『綴方生活』復刻版刊行委員会、pp.33～36.)